

プロフィール

柳田 吉亮（やなぎた よしひろ）

1954年小野市に生まれ。小野高校を経て、大阪経済大学経営学部を卒業。
1994年社団法人小野加東青年会議所の理事長、2000～06年小野まつり実行委員会会長。現在、オーシヤ商事㈱代表取締役、NP0法人北播磨市民活動支援センター理事長、小野商工会議所副会頭を務める。

シリーズ
listen to....

——市民が変えた小野まつりに着目した行政が、次なるステップを求めたこと？

当時はちょうど県が「参画と協働（注1）」という言葉を使い出した頃でした。小野市における「参画と協働」のモデルケースが小野まつりである…と、行政の担当者が認めたということです。かつての小野まつりは、行政が基本プランを出して、それに市民が参加するという形でしたが、変革を遂げた小野まつりは、市民がまつりを企画し、行政を使って（！）実行に移す形になった。市民主体のまつりになったんです。変革初年度のまつりは2000年度第23回の小野まつりでした。翌年、翌々年と進化しつづける小野まつりと、その根幹を為す市民ボランティアの活動は、「参画と協働」

そのものだったのです。これをモデルケースとして、市民組織をうまくコーディネートする組織が作れないか…という相談を受けました。構想はいろいろ練ってはいましたが、調査研究費用すらつかない状態でしたところ、2002年秋に「シビックゾーン検討委員会」の話が持ち上がり、私が委員長になったというわけです。

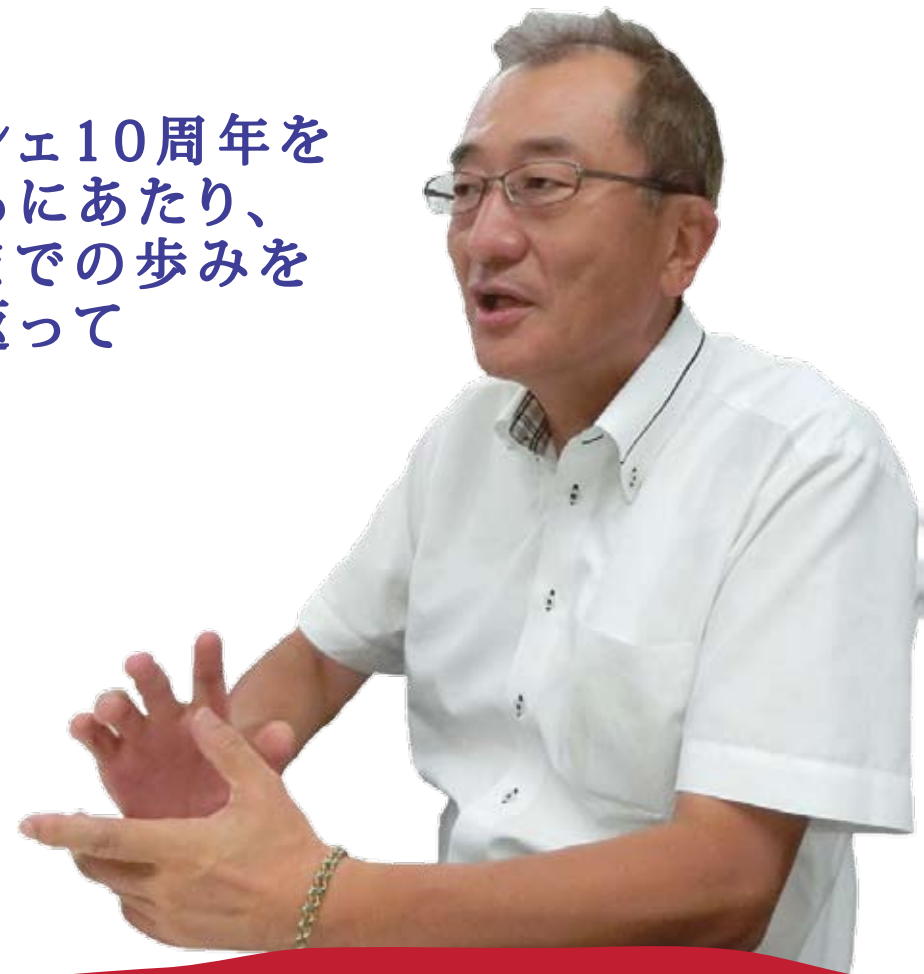
——シビックゾーンの福祉会館建設と、参画と協働のモデルケースである市民組織がリンクしたということですね。

これも運命のいたずらなのか、時期を同じくして指定管理者制度（注2）が施行されたのです。市民活動をまとめるコーディネート組織が必要だと考えていた時に、神戸では震災以降に「中

「なぜエクラという建物を見てようということになったのでしょうか？」

きっかけは、小野市が「福祉会館」的な建物を建設しようとしたことからです。当時この辺りは、図書館・公園・体育館・野球場・陸上競技場などのある地

アルシェ10周年を
迎えるにあたり、
これまでの歩みを
振り返って



やなぎた よしひろ
柳田 吉亮 さん

NPO法人 北播磨市民活動支援センター

聞く Vol.20

アルシェ設立とエクラオープンまで	
2000年 1月	小野まつり検討委員会 発足
2002年 9月	シビックゾーン検討委員会 設置
2003年 3月	指定管理者制度 制定
4月	アルシェ設立準備委員会 発足
7月	アルシェ設立総会 開催
10月	エクラ起工式 開催
12月	アルシェ NPO法人格取得
2004年 7月	小野市議会にてエクラ設管条例 可決
11月	エクラ竣工 アルシェ エクラに指定管理者として入居
2005年 3月	エクラ グランドオープン

しました。準備事務局を中央公民館の2階に置き、7月に設立総会を実施。並行して施設建設にむけての動きも進んでいて、10月には起工式が行われました。そして12月にアルシェがNPO法人格を取得。今年が10周年というわけです。

2004年7月に、小野市議会において、エクラに関する設置管理条例が可決され、指定管理者として選定を受けることとなります。同11月、エクラ竣工と同時に指定管理者として入居、2005年3月20日にエクラグランドオープンの記念式典が行われました。

2015年3月はエクラの10周年ということになります。

《シリーズ聞くv o r . 21につづく》

(注1)市民・事業者・団体等と行政が協力し、共に地域のことを考え役割分担をして活動していくこと。

(注2)地方公共団体やその外郭団体に限定していた公の施設の管理・運営を、営利企業・財団法人・NPO法人・市民グループなど法人その他の団体に包括的に代行させることができる制度。

(注3)地域社会とNPOの変化やニーズを把握し、人材・資金・情報などの資源提供者とNPOの橋渡しをする役割のこと。

域で市は「シビックゾーン」として位置づけていました。ところが近隣他市にある「福祉会館」的なものが小野市にはなかった。そこで福祉と名の付く施設の実情を調査すると、調べれば調べるほど活性化の余地があるということが解ってきたのです。施設を建設し、維持していくための投資に見合う活用が為されることが必要だ、「福祉」だけにとどまらず、福祉も含めた「市民活動」が重要だろう・・・という意見が挙がりました。そして市民が憩い、やり甲斐や生き甲斐を感じることでできる、あらゆる活動を行うための拠点施設を作るべきだ、という風になっていったのです。

また、市民からの意見として「中くらいのホールが欲しい」というものがありました。小野市の市民会館には当時ふたつのホールがありました。1000席クラスの大ホールと、200席ほどの小ホールです。ところが200では足りないが1000では多すぎるというイベントを行うためには市外に出なくてはならず、使い勝手が良くないという意見です。

これを受けて、ホールを含めた市民活動の拠点施設づくりをしようということになっていったのです。

——それは行政サイドから見た経過のように聞こえるのですか？

行政が福祉会館建設にむけて立ち上げた「シビックゾーン検討委員会」の委員長をせよとの声に押されたのです。では何故、委員長を任されたのかというと、小野まつりを変えようという動きの中に僕がいたからだと思います。

——小野まつりが今のような力タチになるための変革期が、14～15年前ですね？

「小野まつり検討委員会」の委員長を任されてしまつて、任されたからには責任があるので、理想のまつり、こんなことができたらいなというまつりの姿を市当局に答申しました。これまでよりもかなり費用が嵩むことや、年度半ばで予算もないことから、まあ答申するだけでしたからもういいか！と思つていたんです。ところが、補正予算を出すのでやれ！と。小野まつりの会長も任されてしまい、やるしかなくなりました（笑）

そしてそれから1～2年のうちに、小野まつりが急速に変化し、おの恋が発展し、市民ボランティアが作り上げる新しい小野まつりになっていったんです。